

令和6年度 第3回 京丹波町子ども・子育て審議会 議事概要

日時：令和6年10月2日（水） 午後1時30分～午後3時30分

場所：京丹波町役場2階 大会議室

出席委員：14名

欠席委員：4名

1 開会あいさつ

(1) 会長あいさつ

会 長：今年の夏はとても暑く、この暑さが子どもたちの体力や気力、経験の機会を減らしていくのだなと感じた。新学期が始まり、真っ黒に日焼けした子どもと真っ白なままの子どもたちが登校するようになった。ただ、真っ黒に日焼けした子どもはほんのわずかだったように感じる。これから運動会の練習などが始まるが、残暑の中子どもたちの体力にも配慮して子育てをしていきたい。

ケーブルテレビの「京丹波町ウィークリー」を見てみると、京丹波町と友好町である福島県双葉町との子ども交流の紹介があった。双葉町の広報担当として私の姪もやってきていて、テレビに映っていた。連絡をすると「京丹波町に行くとき皆さんは温かく、まちの良さを実感できた、今度はプライベートで散策してみたい」と話していた。

また、自分自身が京丹波町のことをもっと知りたいと思ったので、和知の集落を散策した。まずは上乙見に行き、6年前の水害で浸水したが、コミュニティのおかげで誰もけがをしなかったと聞き、地域で防災意識を高めていっしょのことを知った。次に行った仏主では、水車小屋の近くで学童保育に行っている子どもの話をした。このあたりの地域では、父母や祖父母、地域の方が一つのコミュニティで子どもの見守り支援をされていることに感銘を受けた。塩谷では京都から移住してガラス工房をされている方から「京丹波町での子育てをしながらの暮らしは住みやすいし、地域の方にもよくしてもらっている」と話を聞いた。集落の散策がいい勉強になった。

そのような子どもに対する地域の思いを京丹波町子ども子育て支援事業計画に反映し、この思いをコミュニティの中やさらに大きなコミュニティで共有していきたいと再確認できた。このような思いで第3回の審議会も進めていきたいと思っている。皆さんからもご意見をたくさんいただけるとありがたい。

(2) 畠中町長あいさつ

2 こども計画について

(1) 諮問（こども計画の審議について）

畠中町長から会長へ諮問書を交付

(2) こども計画について（こども計画の内容及び策定スケジュールについて）

【事務局による説明】

3 審議事項 第3期子ども・子育て支援事業計画案について

(1) 第2回審議会から本日までの経過と、前回骨子案からの変更点について

【事務局による説明】 西河

会 長：第2回審議会が終わった後、何をキーワードにして、何を目標に設定すればいいのかというところから計画案の作成を進めていた。原教授からは「会長・副会長として何を重点的に記載したいのか、譲れないところはどこなのか、京丹波町らしさとは何か」と問いかけをされたときに、即答ができず、まず私自身が京丹波町を知り、京丹波町を好きになるところから始めることが大切だと考えた。やはり、紙面上の空論で終わらないよう、審議会のメンバー一人一人が本当に困ったときにこれが指針となるようになものにしたいという思いや、自分たちに何ができるか考える機会を審議会の場で共有できたことが良かったと思う。ハード面では計画書の紙面を作成し、ソフト面では我々ができることを着実に考えていくということが大切だと気付いた。

副 会 長：第2回審議会では皆さんからいただいた意見を受け、会長、副会長、事務局で何回も考える機会を持ってきた。資料を読み返し、アンケート結果や結果から見えてきた現状も読み返しながら、京丹波町ならではの、京丹波町だから取り組む事業は何だろうと考えてきた。事務局からコラムの提案があり、テーマ案を見ているだけでも京丹波町ならではの取組みがあるなと思ったが、もしかしたらほかの地域でも似たような取り組みをされているかもしれない。そこで京丹波町らしさを強調するためにはどうすればいいのか考えると、地域のかまい合いやかかわり合いが薄まってきたとはいえいまだにあるのではないかと思う。事業とは別に、地域の特性を大事に残していけないといけないと、話し合いや日々の生活の中でも感じた。また、今もたくさんの子育て事業が行われているのにアンケートでは子育てに困っている方がいらっしやり、相談相手がいないという人もおられる。実施されている事業を知らないからだと思うし、支援にはつながれるように知ってもらえるように伝えたいと強く感じたので、現行計画の「3つの愛」に新しく「つたえ愛」を加えることにした。恐らく皆さんも同じ考えだと思う。

会 長：本日は原教授にも来ていただいているので、忌憚ない意見を聞かせていただきたい。

原教授: 久しぶりに京丹波町に来たが、いい環境だと思う。自然環境と地域住民の方の一体感があるまちはなかなかあるものではない。

【計画の趣旨について】

町長からこども計画の諮問があったが、こども計画の策定では30歳代の若者までの支援について考えないといけなくなる。佛教大学でも、コロナの前後で大学生は大きく変わった。大学の授業で教室に行くと、教室の電気がついていないことがある。学生が150~200人くらいいるが、誰も電気をつけず、真っ暗な教室で待っている。中学校や高校でも同じようなことがあると聞いている。子どもたちは電気をつけない方が楽だと感じる。電気が消えている方が楽なのは、マスクをしている方が楽なのと同じで、隣の人に気を使って時候の挨拶や社交辞令を言う必要がない、電気がつくまでは自分の時間にしたいと考えている。このままだと京丹波町も同じようになる。そうならないための計画だと思う。

会長がおっしゃったように、この計画に込められた思いは何か、このまま放っておいたら京丹波町の良さが徐々に消えていくのをどうやって阻止するか。京都市内や周辺部の小中学校では、コロナでコミュニケーションが取れなくなる傾向が広がっている。京丹波町はそうじゃないと言い返すだけの素材を作るのがポイントになる。京丹波町の環境だからこそできることがあるはずだということが、この計画の中に入っていないといけない。

【「つたえ愛」について】

計画の2ページ目が重要だと思っている。これまでの「かかわり愛、かまい愛、つながり愛」は京丹波町らしくていいが、この審議会で議論した結果、新たに「つたえ愛」を入れたいという結論に至ったのは非常に重要なポイントで、この部分が決定的に欠け始めている。「つたえ愛」というと、年長者が年下に伝えること、若い世代に何か教えなければならないと思われるかもしれないが、「つたえ愛」のポイントは、聴くことだと思う。京都府の保護者のデータを見ると、子どもに対して上から目線で話す傾向がある。子どもの側からすると言いたいことも言えない、コミュニケーションが取れない、反論すると怒られるので面倒くさいから黙っておく、といった状態につながる。これでは「つたえ愛」にはならない。地域の方も同様で、地域の方が若者や小中学生に上から目線で話すと拒否されてしまう。「自分たちは京丹波町で何十年も先輩なんだから、若い親たちや新しく移住してきた方に教えてあげましょう」という姿勢だとどうもいかない。

「つたえ愛」はこちらから伝えるのではなくて、向こうから聞き出す、話をさせることが重要。子どもにどうすればいいのか聞き、「こう思う」と聞き出すことが「つたえ愛」になる。京丹波町で長い間暮らしてきた人が「教えたるで」という態度でいくとうまくいかないと思う。

【「現状と課題」について】

計画の重要なポイントは4ページにある。このページに京丹波町のデータやアンケートから見えてきたリアルが書いてある。エビデンスをしっかりとつけて、具体的なこども・子育ての計画を作った自治体はない。しっかりと実態を分析したうえで、何が特徴なのか、どこがいいところで課題なのか全部書いてある。それを実現するために我々はこんなことをやりますという仕掛けづくりが重要なので、このページが肝だと思う。もっと前に出せばいいと思う。ここが冒頭に会長、副会長がおっしゃった「京丹波町らしさ」だと評価していいと思う。

例えば「認定こども園の利用人数や小学校児童数の減少がみられ、小学校では1学級あたりの人数も減っている」と書いてある。京丹波町の小学生の減少スピードは、人口全体の減少よりも速い。保護者や大人がこのデータをみると、「子どもが減ったら子ども同士の関係が希薄になり、集団が小さくなるので学力が下がるのではないかと懸念される。これに対してどうするのか、ポイントはどこにあるか」というと、その下に「体験・経験は大変重要」と書いてあり、その通りだと思う。体験活動をさせるのは非常に重要で、例えば丹波自然運動公園を使って地元の小中学生やこども園の園児たちが何をやっているのか、何をやればいいのか、どんな行事があればいいのかというのが書き込まれると、京丹波町らしくなる。京丹波町の小中学生の学力は低くない。学校の先生が非常に努力されているからだと思う。頑張っていらっしゃるポイントがあると思う。

子育てを楽しんでいる方が増加しているのは、すごくいいこと。ここを読み流してしまっただけではいけない。京丹波町の良さは、三世代の家庭が多いこと。三世代世帯で育つことにより教育効果が高まるという研究もあり、京丹波町の強みはここだと思う。一方で同じところに「負担を感じる方も2割いる」と書いてある。子育ての何に負担を感じているのか。審議会に参加している若い親世代の方に話をしてもらってみんなで共有し、軽減するためにはどうすればいいのかをこの計画に書き込めるといい。また、「放課後児童クラブの利用時間の延長への要望が高い」と書いてあるが、「この時期までに何時まで延長するようにする」と書かないと計画にはならない。

「子どもたちに『京丹波町はよいところ』だと、大人たちが感じ、伝えていくこと」という記載もその通りで、京丹波町に帰りたいという帰郷意識の形成には、小中学校での成功体験が重要になる。子どもたちが大学を卒業して京丹波町に帰ってきたいと思えるかは、小中学校で楽しい経験をして「京丹波町はいいところだ」と思えるかどうかにかかっている。子どもたちに成功体験をさせるためにはどうすればいいのかを考えて、支援事業計画に盛り込んでいるだろうか。最近の子どもたちは、一人一人に「君の良いところはここ」と自覚させないと、自尊心が上がってこない。この子たちに京丹波町がいいところだと感じてもらう

ための施策はこの計画のどこにあるか。京丹波町に生まれてよかったと思えるような豊かな自然環境は、都会にはないアドバンテージ。それが計画の中に盛り込まれているかが第3期計画の重要なポイントだと思う。8月の打合せでは「今のままだと題名を変えると別の町の計画になってしまう。随所に京丹波町らしさが出てこないといけない」と申し上げたのはこういうこと。審議の際にはそういう点をそれぞれの立場で審議し、計画に反映することがポイントになる。

さらに第1期こども計画では、中高生や若者たちの意識はどうか、アンケートで聞いたうえで、京丹波町にどんな計画が必要なのかを載せていっていただきたい。そうするとほかの市町村とまったく違ったものができると思う。

会 長：忌憚のない率直なご意見を頂いた。先生はいつも熱い思いを熱い言葉で語っていただくことについては私も熱い思いで受け止めたいと思っている。審議会の皆さんからの意見もいただきたい。

原 教 授：みんなから反発が出るのを期待して、あえて申し上げた。皆さんからこうではないのか、これはどうなのかといってもらえるのがポイントで、まだ計画に入れる時間はある。そのような点からご質問や意見、感想でもおっしゃっていただきたい。

委 員：先生のお話が心に響いた。委員の皆さんはそれぞれ各団体からの選出や公募など、さまざまな立場があると思う。自分自身は審議会の中身を地域振興にどう生かそうかと考えて参加している。先生がおっしゃったように、子どもがこの地域に帰ってきたいと思うような地域づくりをするのが教育だと思う。先日も祭りの中で、子どもたちや保護者、地域の人と一緒に夢を語る催しをした。子どもの社会参加を促し、我々が子どもと関わるチャンスを作っていくことが教育だと思う。京丹波町らしさはそれでいいと思っている。今計画に書いてあるのは行政サービスであって、どこでもやっていることが多い。それも重要だし、それに色付けをしていくのは我々の思いだと思う。地域の場でのコミュニティづくりは、審議会場で学んだ我々が地域に持って帰り、地域の場でコミュニケーションをとっていくことなのではないか。計画作りはさほど大きく考えずとも、どう実践するかが大事だと思う。

原 教 授：計画は計画としておいて、委員の皆さんそれぞれの立場で計画に従って、何ができるのか。自分たちの学校では何ができるのか、それを持ち寄って共有をしていこうという思いを語っていただいた。

委 員：保護者としてアンケートに協力することがたびたびある。アンケートの結果やどう反映されたのかが、いち保護者には返ってこない。この計画案では目に見える形で書いてあり、答えた意味があったと目に見えるようになったことについては、答えた側としてはいいのかなと思う。

和知地区では子どもの人数が少ないのでそうせざるを得ない面もあるが、縦

割りの制度はいいところだと思う。今年は小学校と中学校が合同で運動会を開く。小学1年生から中学3年生までが縦割りで何かをするような、他学年との交流を大事にしている地域なので、京丹波町の良いところとして推していいことだと思う。今年の運動会はコロナ禍が明けたこともあり、地元の老人ホームから見学に来たいという話があった。小学校に入る前の子どもからお年寄りまでが参加できる競技を作ろうと、玉入れをすることにした。子どもたちが地域を巻き込んでできることを考えて、交流や体験の機会ができるのはいいことだと思う。

下山小と竹野小の児童が合同でカヌーの体験に来たことがあった。2校の子どもたちが交流することで、単独ではできない体験ができたのだろうと思う。子どもの数が減ってきて、単独ではなかなか行事もできなくなりつつあるので、学校や地区に縛られずにやっていけるといいと思う。

原教授: 計画にそう書いてもらえたらいいと思う。異なる学年の交流という意味での縦割りは、教育学的には自尊感情を上げる効果が大きい。学校同士の交流も重要で、小中一貫で子どもたちを支えている地域が、お年寄りも参加して運動会を開くというのは、一昔前の京都にはあったが、今は消えてしまった。それを復活させようというのは京丹波町のアドバンテージだと思う。学校を越えた交流が重要だとほかの自治体が計画に書いても実践はなかなか難しいので、そこが京丹波町らしさだと思う。そういう取り組みを増やしていくのはいいことだと思う。

委員: 最初に思ったのが、この計画で具体的に何をしてどんな成果があったのか、見直す必要があるのか、うまくいきそうなのか難しそうなのか、というようなことを分かるようにしてもらいたい。進捗状況を知ろうと思えば知ることができるという形を作ってもらいたい。計画を作って終わりなのではない。

体験を大切にすることについて、自分自身も移住してきたが、子どもたちが減っている中で体験をどうするかとなったときに、少ない子どもたちと地域のつながりを大事にしていく必要はあるが、現実問題として先細っていくのであればいずれ限界は来ると思う。先細ることが見えているのであれば次にどうするか。イベントのリピーターのような、町外から京丹波町の良さを感じてこられる関係人口が重視されているが、地元の子どもたちにも何か活動や体験をして成功体験を積んでいく場を作っていってほしい。

オーストラリアのホークスベリー市から留学生が来られている。コロナで中断はあったが30年間続いており、今年の夏には京丹波町の子どもたちがオーストラリアに行って体験をして帰ってきた。濃密な楽しい体験のはずなのに、その子どもたちが30年間の事業で(実施している)国際交流協会に入ってくれるようになったかという、最初に参加した1人しかいない。ほぼ戻ってきてくれない。国際交流の面白さ、大切さを地元の子どもたちが体験してくれたのなら戻って来るのではないかと思っていた。成功体験の話があったが、与えるばかりで

終わっていたのではないかと思う。自分たちが主人公として、最後はうまくいって心に残ることができれば戻ってみたいと思ってもらえるのかなと思う。

原 教 授: 仕掛けづくりが最初からできていないといけない。成功体験をした子どもたちに、次の世代のために企画してもらおうようにしていくと、次の世代が育っていく。京丹波町では、強制をせずにやりっぱなし、与えっぱなしで、次の世代を育てていないというところがあるのかもしれない。「来年はあなたが計画してください」というところまで紐づけてやっていると、リピーターが増えていくと思う。

計画の実行に関して、京都府では行政点検評価をやるので、計画を立てると必ず見直し、目標値や内容のマイナーチェンジをする。できなかったことを分析し、できるようにするにはどうすればいいかを考える。5年間の計画なので、5年後に大きな見直しをするという前提で、毎年小さな見直しをしていく、そのような第一歩にするというのは重要だと思う。

委 員: 子どもが小学生だったときに、授業で未来（10年後）の京丹波町を考えるという取り組みを行った。どのようにしたら活性化するのか、人が増えるのか、さまざまな視点で班に分かれてデータを収集したりして調べた。町に連絡をして、町議会議員や保護者を呼んで発表をした。子どもらしい視点で京丹波町のことを考えているということが分かって、紐づけられることがあるのではないかと見ていたが、見に来られていた人の中の講評で、上から「その調べ方はね～」という人がいた。いろいろな人が見てくれるかもしれないと、楽しんで一生懸命調べ、いいものができたので発表すると言っていたが、最後にそういうことがあると、失敗ではないが否定された形で終わってしまったように感じた。「こうした方が良かったんじゃないか」という言葉が残ってしまって悔しい思いをした。そのようなことはあったが、発表はとても良かったので、いろいろな学校で共有したり、ほかの学校でされている取り組みもあると思うので、町がそれをくみ上げることで、何か生かせるものはないか。子どもたちの視点でこのように考えている、子どもたちはこのようなことを望んでいるが大人たちは何ができるのかというようなことを入れるのも子育て支援につながるのではないかと思う。保護者側か、取り巻く環境か、子どもの側なのか、どの視点からなのかがぼやけているのではないか。

原 教 授: どの目線からという言葉があったが、すべての目線からが必要だと思う。子どもの目線や保護者のサポートの目線など、いくつか目線はあってもいい。データを見ると、京丹波町は町の広報紙が読まれている。宮津市で高校生が由良川の調査をした時、地元の新聞が大々的に取り上げた。広報紙やメディアに載せて、褒めてあげると自分たちのやったことが自分たちだけで閉じない。

京丹波町には地元紙も町のテレビネットワーク、広報もある。それらを活用して、子どもたちがやったことやアイデアをみんなで共有するようにすると、その

子が学校に行くときに近所の方から「いいこと言っていたな」と声をかけてもらえるようになり、それが街の活性化や子どもたちが将来を考えるときの展望につながっていく。町が持っている広報紙などの媒体をどう有効に使っていくか、子どもたちをどう乗せていくかの仕掛けづくりが必要かもしれない。褒められたらもっと頑張ろうと思うのは、大人も同じではないか。

第3期計画はすごくいいものになり始めている。そこに皆さんの思いを乗せながら、有効に使ってもらい、次の世代を育てるためのツールや保護者の皆さんのための有効なツールにした方がいい。そのような思いで会議を続けていただくといいと思う。

副会長：計画の素案について様々な意見をいただいた。原先生からも様々な言葉をいただいた。発言は限られた方だったので、ほかにも思いを持っておられる方がいるかもしれないので、事務局に気軽に声をかけてほしい。この後の進め方として、事務局提案で進めていって構わないか、今後も意見を頂けると思うが、修正については、会長と副会長、事務局に一任していただくということで、承認いただけるか。

(委員による承認)

副会長：計画の素案と今後の修正については承認いただいたということで確認させていただいた。事務局においては今後もより良いものになるよう作成を進めていただきたい。

(2) 今後の計画策定の流れについて

【事務局による説明】

委員：これから計画をまとめていくなかで、計画が計画で終わらないように時期などを入れたらどうかということをおっしゃった。審議会で決められることではなく町全体の施策として考えていくことなので、本当にできるのかということがあるかと思う。自分自身も計画の策定に関わったことがあるが、ほかの計画との整合性もあるかもしれないし、ほかの計画に書かれていることをこの計画でも書く必要があるのか考えることも必要かもしれない。7年度から計画が始まるので実際どうなっていくのか、具体的にできることをしていくことになると思う。年度内に計画を仕上げ、年度ごとにブラッシュアップしていくことも考えてもいいのではないか。

事務局：事務局としても、出てきた課題の解決策を残りの半年で出せるのかということと難しい。この事業がこの課題を解決するためのものというのを挙げてくるのは難しいので、解決までに至っていないところも確かにあると思う。しかしながら課題については認識しているので、この5か年の中でやらないわけではなく、計画にない事業でも新たにできるアイデアがあれば実施することになる。現時点

では具体的に解決策はこれだと打ち出すことができなくても、今後研究していくことになると考えている。計画を実行していく中でこれから課題が変わっていくこともあると思うので、常にニーズを把握しながら新たな施策を考えていきたい。

会 長: 原教授の見送りに同行したが、皆さんが一生懸命意見を言っていたという雰囲気感銘を受けたとおっしゃっていた。審議会の皆さんがなんとか京丹波町で子育て支援に参画したいと考え、そう思う人たちが集まって自分たちが何をするのか考えられたことは意義があると思う。

事務局: 審議会から答申をいただくことになっている。前回の答申でもフォローができていない部分は課題として含めていた。今回も答申の中で、今後5年間に必要なことを書き込むことはできるので、審議会の皆さんからもご意見を頂きたいので検討をお願いしたい。

委 員: パブリックコメントの実施とあるが、どういう意味なのか、かみ砕いて説明してほしい。

事務局: 計画についてHPや公共施設等で住民の皆さんにご確認いただき、ご意見をもらうことを予定している。アプリやHPを通じて、周知することを考えている。

委 員: パブリックコメント実施について、広報誌には情報が載るのか。

事務局: 10月号の原稿の〆切がすでに終了したので、タイミング的に難しい。

副会長: アプリでの周知は可能ではないか。

事務局: 可能なので、アプリを通じた広報はしたいと考えている。

副会長: パブリックコメントの結果を広報紙に載せてはどうか。

委 員: パブリックコメントは一般的に浸透している言葉なのか。言葉が聞きなれないので、パブリックコメントといっても意見が集まらないのではないかと。

委 員: パブリックコメントは行政に関心のある方は知っていて、よくご覧になるかもしれないが、一般的な言葉ではないと思う。パブコメを求められても、QRコードなどを通じて大量の資料を読む必要がある。募集していても気軽に参加できない。意見を聞いていますよという行政のポーズかなという認識だと考えているところもある。

事務局: 名前については分かりやすくなるように検討していきたい。掲載する場所以外も考えていく必要があるかもしれない。

委 員: 自分自身も計画の策定に関わることがある。行政に関心のある方は意見を言われるが、なかなか自分ごととしてとらえられていない方も多く、意見が出ないこともあると思う。自分の意見やアンケートの内容が反映されていて、今後5年間こんなまちになってほしい、こんな子育て施策をしてほしいという意見が反映されていたら計画が自分ごとになり、いろいろな意見が集まると思う。住民の皆さんの意見を反映した計画を策定しようと思うので、確認をしてほしいとい

う発信をすれば見てもらえるのではないか。計画書のボリュームや見てほしいところなど、伝え方を考えることは必要かもしれない。

事務局：パブリックコメントは行政でよく使う言葉なのでなかなか浸透していないところもあるかと思う。一般の方に広く意見を聞くということは、透明性の確保にもつながっていく。いろいろな方に見ていただける工夫は事務局で考えていけないといけないし、委員の皆さんもそれぞれの所属で、パブコメに協力してもらえよう声かけなどの協力をしてもらえると大変ありがたい。

4 事務連絡（次回予定）

【第4回審議会】日時：令和6年12月10日（火）午後1時30分～

場所：大会議室（本庁舎2階）

5 閉会あいさつ

副会長：8月に（会長と副会長で）原先生と打合せをした時、「会長さんや副会長さんはどう思いますか」と尋ねられて言葉に詰まることもあった。思っていたらしゃることを鋭く切り込んでいただけるのでありがたいと感じている。本日お越しいただいて、考えもよく分かり、我々も考え直したり、考えを深めたりできたと思うし、これまでの審議会で我々が審議してきたことについても自信を持てたのではないかと思う。今日の原先生のお話は、子ども目線や学生目線で、これからも京丹波町の良さを残していくためには子どもたちをどのように育てていくのかという切り口が多かったと思う。

立場上、子育てをしている保護者の目線で子育てのことを見てしまうが、最近子育てしている世代の言葉として、乳児健診に来られたお父さんが「子育てって協力するのではなくて一緒にするものなんですね」といわれるのを聞いて、意識が高まってきていると感じた。また、お試しで子どもをファミサポに預けたお母さんが、「短時間だったけど助けてもらったので、やりたいことができた」と笑顔でおっしゃっていた。支援についてご存じで、活用していらっしゃる方もいる。ただ、ファミサポを利用しているお母さんの中には「あまりたくさん利用すると楽をしていると思われるかもしれない。ファミサポを利用していることを言いたくない」と考えている方もいる。周りの目や周りの人が言っていることを気にするという地域性がまだ残っていて、若い子育て世代にも影響しているのだろうかと思った。周りを気にせず、必要な時に必要な方が必要な支援を気楽に受ける土壌を作っていけないといけないし、まだまだ改革をしていけないと思う。

これからこども計画の策定も始まる。ここに来ていただいている皆さんの力は大きいと思うので、今後も皆さんの力を貸していただきたい。私たちが新たにこども計画で対象になる30代までの若者も含めて考えていきたいと思う。